

2023年6月20日 NO.135号 障害児・者サークル通信

発行：性教協★障害児・者サークル事務局

一般社団法人“人間と性”教育研究協議会（性教協）本部・事務局

〒151-0071 東京都渋谷区本町1丁目7番16号 初台ハイツ1006号

HP <https://shogaiji-sha.seikyokyo.org>



● 特集「今、沖縄を考える」	1
● 連載「軽度知的しうがいの青年たちの恋愛、性交、出産、子育て」(第2回)	6
● お知らせコーナー	10

特集 今、沖縄を考える

135号では、性教協会員の安里瑞穂さんをゲストに迎え、沖縄が抱える問題や、それを通して見えてくる日本社会が抱える課題を考えます。最初に、安里さんに沖縄で精力的に取り組まれている平和運動に関わるまでの経験を寄稿していただき、その原稿を基に障害児・者サークルの編集局のメンバーで座談会を行ないました。皆さんもこの機会に、ぜひ、沖縄の今を考えてみませんか？

＜私が平和運動に取り組むまで＞

平和運動に取り組むきっかけは何だったのか、と問われ思いついたこと。まずは私の生い立ちにあるのかと思います。私は養護学校教員の母（全障研会員でもあります）と中学校美術教員の父の子どもとして、母の実家がある青森県で生まれ、神奈川県で育ちました。戦争や平和、歴史、差別についての話が生活の中にあるのが当たり前の環境で育ちました。幼いころ、父が友人とお酒を飲みながら歌っていた「沖縄を返せ」は、今では私が歌うようになりました。父の影響で、在日朝鮮2世の方やカンボジアからの難民の方とも交流する機会が何度かありました。どちらも歴史や差別、平和について、実体験からお話を伺うことができた素晴らしい出会いでした。

沖縄には大学進学をきっかけに移住しましたが、沖縄の大学をめざすことにしたのは、浪人時代に

父の同僚と2週間沖縄を旅してまわったことが大きかったと思います。その旅では、沖縄の美しい海を満喫するためにスクーバダイビングのライセンス取得講座を受講したり、伊江島の反戦地主阿波根昌鴻さんのお話を伺ったり、石垣、西表島の自然を体感することができました。沖縄戦の知識がほとんどなかつた私は阿波根昌鴻さんの本を読み、沖縄戦を学び始めました。

沖縄に移り住んでからは、学業を優先するという言い訳で、本を通して学びを続ける程度で、米軍基地関連への抗議集会や平和行進など、その存在すら知らずに過ごしてきました。大学を卒業し、すぐに養護学校教員として採用になり、組合活動の中で集会や平和行進に参加するようになりました。沖縄戦だけではなく、沖縄戦から続く米軍基地の影響等に关心は移っていました。沖縄戦は過去のことで大切な教訓ですが、米軍基地の影響は現在進行形で、自分たちの生活に直結する問題ですから、関わっていくのは当然だとの思いがありました。それでも、できることとしては県民大会等の大きな集会や、署名等の活動に参加し、関心を持ち続けることくらいでした。

決定的に関わり方が変わったのは、2016年7月沖縄県北部にある東村高江の（米軍）ヘリパッド工事